



episode.13

## 沢山の人に愛されてきた ホタル

話し手 二渡がらっぱボタルの会 会長

しもむぎ きよまさ  
下麦 清正さん (昭和26年3月24日生)

聞き手 川島学園 れいめい高等学校

2年 吉井 陽南

2年 後藤 羽愛

### 「ホタル舟誕生」

高校を卒業して、8年間地元を離れ昭和52年に帰ってきました。その時には、ホタルがたくさんいました。だから、私にとってホタルは珍しいものではなかったんです。当たり前にいるものだと。

でも、年に2、3組鹿児島市内から「この辺りでホタルがたくさん見られる所があるそうですね」とホタル見物に来る方はいました。その場所が二渡新田の水路です。そこは本当にたくさんいました。手を伸ばせば捕まえられるくらい。

この辺の人たちは初夏になると鮎獲りをしていたんですよ。だから家庭で川舟を持っていました。2000年頃に漁仲間と「舟を出してそこでホタルを見ながらご飯を食べよう」と話が出たんです。それでホタルの時期になると、舟を出して漁仲間やご近所さんとホタルを見ながらご飯を食べ始めました。それがいつしか、いろんな人に話が広まって行って、「私も連れて行って」とお願いされることが増えて、「それなら村づくりのイベントにしよう」と始めたことがきっかけです。

### 「ホタル舟開業への苦勞」

イベントにするために観光バス会社に協力をしてもらおうと、いろいろ電話したんです。そしたら、「安全性」や「人数制限が…」などの理由で断られたんです。川船一艘だけだと、乗る人数も限られるし、転覆の可能性もあるんです。だったら、3つの舟をくっつけたらどうだろうと試しに作ってみました。そして、それを鹿児島市にある小型船舶検査機構に、「こういう舟を作ってイベントをしようと考えてる」と相談へ行っただけです。そしたら、舟の安全性についていろいろ教えてくれました。「ここを補強しなさい」とかね。それから3年間、試行錯誤してようやく一艘、検査を通すことができました。それが2003年くらいです。そして、その頃にイベントにするために「二渡がらっぱボタルの会」を作りました。

でも、2006年7月に水害が起こりやっとの思いで作った舟が目の前で流されてしまいました。本当に涙が出ましたね。それでも、やめる気にはならなかったんですね。

「ホタル舟はどうするか」と言ったら、みんな楽しみにしてくださったから、寄付金とかいただきながら、また一から始めました。翌年は、寄付金のお礼も兼ねて燃料代と保険代だけの運賃300円で運行しました。すごくたくさんの方々に来ていただきました。そうしてどうにか続けてこられました。



### 「最盛期と現在まで」

ピーク時期は2011年くらいですかね。2週間ちょっとで2,000人近くの方に乗って頂くことができました。全国から来て頂いて、一番遠い方は北欧の方でした、ノルウェーだったかな。

口蹄疫という牛の病気で中止になったことはありましたけど、それ以外は、毎年運航して無事故でした。

でも、2020年はコロナで中止になって、21年の大雨でホタルがいなくなりました。そして今年、ホタルの減少で最後の運航になりました。すごく残念です。今までの実績もあってお客さんも増えてきた頃だったから。

### これからの「二渡がらっぱボタルの会」

「二渡がらっぱボタル」というのは、二渡は、ここの地名ね。そして、「がらっぱ」というのは「かっぱ」のことね。川内川はかっぱの話がありますから。だから、「川にいるかっぱと同じ目線で、ホタルを見よう」という意味で名付けました。

今後は会自体は残して、ホタルの観察はしていきます。もしホタルが復活しても、私なんかはもう歳で次はできないでしょう。でも、やり出すと楽しいのよね。

